

公益社団法人千葉青年会議所 2015年度 基本方針

2015年度理事長予定者
直井 孝 祐

基本理念

力を合わせること。支え合うこと。そして、一団となること。

スローガン

けっ
結

そく
束

基本方針

1. 組織を充実させる
2. 徳育
3. 子供社会を生きる
4. 人とのふれあいから得る活力
5. 地域に寄与する気持ち
6. 新しい風土
7. 情報と経験の持ち帰り

◆はじめに～青年会議所の存在価値

青年会議所は「新日本の再建は我々青年の仕事である」とし、設立され、その気概を現在もお継承しています。本物の価値が要求されている現在、会員各々が、経済人として、社会人として、人間として光輝く存在でなければ、組織の魅力も薄れ、青年会議所の存在価値もなくなってしまうのではないのでしょうか。

「人は人によって磨かれる」という言葉のとおり、20歳から40歳という人生で最も輝くことができるときに、出会った人と切磋琢磨し、そこから「活力と知力」を得る、それが青年会議所活動であると考えます。人は、人と出会い・ふれあい・共に行動することで人間となり、そして、人間は徳を育むことを生涯とします。

青年が人間としての徳を育み、青年会議所はその徳の集合体となることで、社会から価値のある団体と認識されるのではないのでしょうか。そして、それが青年にとって、青年会議所に属する価値となるのだと考えます。

◆組織を充実させる

組織には風土があります。組織風土は、これまでの歴史によって築かれたものであり、それはたやすく変えるものではありません。ただ、将来からみれば現在もまた歴史であり、今もその風土が築かれていると考えます。おそらく、組織風土とは、その組織規範に大きく影響されるものであります。そして、組織規範とは、一つの社会あるいは特定の組織の中で、その成員が自己あるいは他者の行為に関し、ある一定状況のもとに何をなすべきか、何をなすことを期待されているか、あるいは、逆に何をしてはいけないかということについて、共有している共同主観的な意識・行為基準であります。よって、今ある組織規範に忠実であることで、時代に沿わない意識・行為基準があぶり出され、それをいかに変えていくかの試行錯誤、また、議論がなされていくと思います。その繰り返しで、新たな組織風土を構築し、将来の充実した組織を形成すると考えます。

◆徳育

組織は人で構成されています。組織の‘道徳・モラル’を向上させるためには、人の‘徳’を育てなくてはなりません。人の‘徳’とは、「他人の問題も組織の問題も、結局は個人に帰結するものとし、人として生きるのではなく人間として生きることを自覚すること」と考えます。そして「徳が大事である。徳を高めたい。」ということを考えること、その精神の修養によってその身に優れた品性が生まれ、人徳を得て、人と人との繋がり・絆が形成され、その中から人間力あるリーダーが生まれるものと考えます。

よって、われわれは、まず「人として尊いものは徳である」ということの認識をし、また、‘徳’をもってして人と人との繋がり・絆が形成され、その中から人間力あるリーダーが誕生するという理解をし、そこに自分がいかに寄与するのかを考えるべきなのです。

◆子供社会を生きる

今も昔も、「子供たちの、子供たちによる、子供たちのための社会」のようなものがあり

ます。時に、大人社会より厳しいものであったりします。もちろん、子供社会には、政治などはないでしょうし、特に明確なルールもありません。ただ、子供たちは、集団の中で各々のポジションを自覚し、そのポジションで生きているのです。そこで、自己のポジション取りに失敗してしまう場合、ポジションを見誤ってしまう場合、急に今あるポジションから脱しようとしたときに、周囲に違和感を与え、その違和感が顕在化し、いじめに発展してしまうのではないのでしょうか。もちろん、いじめの根源がそれだけではありません。

ただ、子供たちには、集団の中での自らのポジショニングの能力を身に付けてほしいと考えます。自らの意識、性格、能力、キャラクターを理解したうえで、どのようなポジションを取るのかを判断する。そして、自己の望むポジションにつきたいのであれば、どのように自らを変え、向上するかを考えてほしい。その試行錯誤が、大人になり、社会に出たときに必ず生きてくるのです。

◆人とのふれあいから得る活力

人は、人と出会い、そして共に行動することで活力を得ます。共に行動する相乗効果は果てしないものといえます。会員相互の絆は、その基盤となるものです。よって、積極的に会員相互の交流を促し、メンバーの個性を集め、生きたネットワークを構築し、絆を深めなくてはなりません。また、千葉青年会議所には、55年の歴史と伝統があり、そこにはOB特別会員の絆を感じることができます。これからの歴史を刻むべく、OB特別会員との交流を積極的に行い、より大きな絆を形成すべきです。そして、日本青年会議所、同関東地区協議会、千葉ブロック協議会には、多くの同志がいます。その同志との交流はもちろんのこと、同士が各地で構築している絆・ネットワークを見本とするべきです。そして、絆が強固なものとなれば、他者への奉仕や自己犠牲が心地よいものとなり、メンバーの共存が有意義であることの理解となり、さらなる個々の活力、組織の活力が得られるのではないのでしょうか。

◆地域に寄与する気持ち

日本古来の文化の中で、「まち」に暮らす人々には、固有の考え方や習慣があり、そして役割分担がなされ、運命共同体的な絆が存在していました。その根底には、自分たちの「まち」は自分たちで守るという自立した考え方があったのだと考えます。現代においては、経済至上主義、行き過ぎた物質主義、個人主義により、その絆や考え方は薄らいでいます。

まちで暮らす人たちが「まち」の現状や将来に関心をもち、自主的で自立的な意識をもつことが理想であります。ただ、まずは、自らの「まち」は、他の「まち」よりも素敵でありたいという市民意識を広めることから始めてはどうでしょうか。自らが暮らす「まち」にプライドをもち、自己が属する地域社会をよりよく評価されたいという意識をもつことが地域活性の種となり、「個と公の絆」を築くものと考えます。

◆新しい風土

J C運動は少ない人数でもある程度は可能です。しかし、地域に寄与する気持ちの波を

起こし、千葉市や周辺地域にその波動を伝えていくには、より多くの同志をもつ人が必要なことも事実です。また、組織の活性化に、新しい人材は必要不可欠なものです。そして、これまでの組織風土にとらわれることない自由な感性が、新しい風として、新しい風土をつくることもあります。よって、自分たちの声を高らかにあげることで、賛同してくれる新しい仲間をより多く迎える必要があります。

◆情報と経験の持ち帰り

青年会議所メンバーが広い視野を身に付け自己を磨く場は、国際青年会議所、公益社団法人日本青年会議所、同関東地区協議会、千葉ブロック協議会にもあります。積極的に参加し、より多くの人と交流し、そこでの経験を自己の研鑽に役立ててほしいと考えます。そして、千葉青年会議所がより魅力ある団体と進化するためのヒントを得てきてほしいと考えます。

◆おわりに～

青年会議所において、「利他の精神」という言葉をよく耳にします。地域のために、家族のために、パートナーのためになど様々あると思います。人を思い、人の喜ぶ顔が見たくて、多少の負担を気にせずに尽力するという事は、それによって自らが充実感や満足感を得たり、喜びを得たり、幸せな気持ちになったりするためなのかもしれません。つまりは、自分のためなのです。

大切なのは、人のために尽力することに喜びを感じる人間になるということだと考えます。